

ベートーベン「第九」を歌う

片山 祐子（教育・昭和 43 年卒）

第九を歌うことはじめは、平成 17 年の観音寺市合併記念音楽祭である。退職したばかりで、何かを始めたいという意欲に燃えていた折り、団員募集に応募し、八ヶ月に及ぶ練習をこなしてのステージとなった。ドイツ語の発音に四苦八苦し、今や世界的指揮者となった山田和樹氏率いる瀬戸フィルとの共演であった。無我夢中での本番、「ゲッテル・フンケンヤ」と歌い切った安堵感が今もよみがえる。楽譜に残る山田氏のサインが充実の日々を思い起こさせる。

そして昨年 11 年ぶりに再び「第九」を歌うことにした。「香川第九を歌う会」の仲間入りをしてのステージ。県民ホールでの大合唱は、少しゆとりをもって歌い終えた。たった一度の経験が、いろいろな形で役立った。むろん三ヶ月ほどは練習に専念したし、歌仲間もいて気分的にゆとりがあった。

今回は、藤岡幸夫氏と関西フィルハーモニーとの共演で、初めてレグザムホールの大舞台に立ち、ホールがいつもと違って見えた。合唱の始まる第四楽章までを交響楽団の音の響きや指揮者の様子を観察して楽しんだ。

そして今年 6 月 3 日、チャンスがあって、「鳴門第九 100 周年記念」の「第九」合唱に参加した。板東俘虜収容所でドイツ兵による第九合唱は 6 月第 1 日曜日だということをこの時知った。それから 100 年の月日が流れたことになる。第九の聖地は鳴門、第九を歌うなら一度はこの地でと考えていた。念願かなっての参加であった。何とここには全国から第九を愛する人々が集まっていた。さらにドイツはむろん、アメリカや台湾など海外からの人々も集う総勢 2,400 名もの大合唱団となり、前日と当日の二回に分けての参加となった。徳島交響楽団とドイツ人の指揮者で、国際色豊かな演奏会となった。ステージ後方に登壇した私のとなりは、札幌の人と栃木の人だった。そして大団圓に近づくとつれて歌声は高まり、とうとう一つになったという瞬間を体感した。「オー・フロイデ」人類は皆兄弟、平和と愛を今こそ共に求めていこうというベートーベンの祈りにも似た想いがビンビン心に響いた。

後日朝日新聞投書欄でこの日の演奏会を訪れたご夫妻の『「100 年の第九」音楽の持つ力』を読んだ。「もと俘虜の子孫もまじえた熱気あふれる演奏会」と記されていた。